

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

序

近年、「文化」の概念が広義にとらえられ、私たちのライフスタイルすべてが文化であると考えられるようになってきました。そして、その活動は、一部の人々のためのものではなくて、地域全体がかかわりを持つようになってきて、地域づくり・まちづくりとの関連でとらえられるようになってきました。

特に、歴史・文化財・伝統的なまつりなど、いわゆる歴史的文化遺産を素材としたまちづくりが活発になっています。文化財の保護と活用が上手にしている事例と言えましょう。

ところが一方、同じ歴史的文化遺産であっても、遺跡や遺物などの埋蔵文化財については、除却に理解を得つつありますが、まだまだ前者の比ではありません。地下に埋蔵され、目にふれにくい文化財であることが原因かもしれません。遺跡や遺物等は、当時の人々の生活状況や社会構造・文化などを具体的に知る貴重な資料であるとともに、一旦破壊されると再び元にかえすことができない文化財です。

したがって、行政としては、その保護・保存には十分配慮していかなくてはなりません。私たちが社会生活を営むうえで、種々の開発行為も止むを得ない場合がありますから、発掘調査も必要になります。今後とも地域の開発と遺跡の保護との調整を図りながら、埋蔵文化財保護意識の高揚に努めてまいりたいと考えております。

発掘調査を実施した田井座遺跡は、過去数か所で調査が行われた結果、縄文時代から弥生時代の遺構が認められたところです。今回の発掘調査は、限られた範囲での調査の為、遺跡全体の解明には至りませんでした。調査結果については、本報告書をご覧いただければ幸いです。

最後に、本調査実施にあたり、多くの方々のご理解・ご協力をいただきました。飯田総合ハウス不動産、隣接地の方々、調査に従事いただいた作業員の方々ほか関係者のみなさんに心から感謝申し上げます。

平成3年3月

飯田市教育委員会
教育長 福島 稔

例 言

1. 本書は、飯田市鼎、一色140-2番地の田井座遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が、飯田総合ハウス不動産の委託を受けて実施した。
3. 本書の発掘調査に関し、遺跡名を「田井座遺跡」とし、遺跡名の略号にTIZを用い、ほかの田井座遺跡の調査との混同をさけるため、発掘調査及び整理作業において、略号の後に番地140-2を付して調査にあたった。
4. 調査実施にあたり、2m四方の区画を設定して作業を行った。区画の名称は調査対象地の北隅を起点に南西に向かって1・2・3～、南東へ向かってA・B・C～とし、それぞれの区画の名称はB5、J8などとなる。
5. 調査は、平成2年8月24日に試掘調査、引き続き9月24日まで現地作業を行い、その後飯田市考古資料館で整理作業を行った。
6. 本報告書の記載は、住居址を優先し、順次そのほかの遺構を掲載した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。また、遺構の番号は、周辺の田井座遺跡の調査からの連番とし、竪穴住居址は37号、溝状址は4、土坑は60からとした。
7. 本書のまとめ・調査の経過等は、小林正春が、遺構等の記述は佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行った。
8. 文書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行い、小林が統括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器の表現として、使用痕及び擦痕は図内及び図外に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例言	
目次	
I 経過	
1 経過	1
2 調査組織	1
II 遺跡の環境	
1 自然環境	3
2 歴史環境	5
III 調査結果	
1 遺構と遺物	
1) 堅穴住居址	9
① 37号住居址 ② 38号住居址	
2) 溝状址	11
① 溝状址4 ② 溝状址5 ③ 溝状址6 ④ 溝状址7	
3) 土坑	13
① 土坑60 ② 土坑61	
4) その他の遺構	14
① 時期不明の穴	14
5) 遺構外遺物	14
IV まとめ	17

挿 図 目 次

挿図 1	田井座遺跡及び周辺遺跡図	4
挿図 2	調査位置及び周辺図	6
挿図 3	田井座遺跡遺構体図	7・8
挿図 4	T I Z 37号住居址	9
挿図 5	T I Z 38号住居址	10
挿図 6	T I Z 溝状址4・5・6・7	12
挿図 7	T I Z 土坑60・61	13
挿図 8	T I Z 時期不明穴址（北西部）	15
挿図 9	T I Z 時期不明穴址（南東部）	16

図 版 目 次

第 1 図	T I Z 37・38号住居址 時期不明穴址、遺構外遺物	20
-------	------------------------------------	----

写 真 図 版 目 次

図版 1	調査地調査前（北から）、調査区全景（北西から）	22
図版 2	37号住居址（北東から）、入口部施設、炉址	23
図版 3	38号住居址（南東から）、入口部施設、炉址	24
図版 4	溝状址 5、溝状址6・7、土坑60	25
図版 5	北西部時期不明穴址及び溝状 4、南東部時期不明穴址	26
図版 6	37号住居址出土遺物	27
図版 7	38号住居址出土遺物	28
図版 8	時期不明穴址出土土器、遺構外出土遺物	29
図版 9	トレンチによる試掘調査、試掘トレンチの精査	30
図版 10	試掘トレンチ掘上げ状態、重機による表土剥ぎ作業、住居址掘下作業	31
図版 11	住居址掘下げ作業、遺構掘下及び測量作業	32

I 経 過

1. 経 過

平成2年7月20日付けで、飯田市今宮町3丁目に所在する飯田総合ハウス不動産より、飯田市鼎一色の当該地において店舗建設のための造成工事を実施する計画がなされ、埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。

当該地は、国道153号および市道運動公園通りに接する場所であり、昭和62・63年度にそれら道路の建設に先立つ発掘調査により、縄文時代前期初頭及び弥生時代後期の竪穴住居址が発見され、当然今回の造成予定地も集落址の一面を成すと考えられた。

前述の計画を受け、平成2年8月24日現地において、試掘調査を行い、同日その保護策等の協議を開発主体者である飯田総合ハウス不動産と文化財を保護する立場にある長野県教育委員会文化課及び飯田市教育委員会とで行った。

試掘調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居址の存在が確認され、8月27日再度現地において開発主体者と飯田市教育委員会とで協議し、発掘調査を飯田市教育委員会が行うこととなった。

なお、工事の計画からして、早急に発掘調査を実施せざるを得ず試掘調査後引き続き現地での発掘調査を実施した。

発掘調査は、試掘調査により遺構の確認された箇所を中心に、重機による表土剥ぎ作業を行い、その後人力により9月24日まで現地における諸作業を実施した。

その後、飯田市考古資料館において、図面類及び遺物の整理作業を行い、本報告書作成にあたった。

2. 調査組織

調査担当者	小林 正春
調査員	佐合 英治・吉川 豊
作業員	松下 直市・吉川 正実・松島 卓夫・松下 成司 豊橋 宇一・正木実重子・坂下やすゑ
整理作業員	池田 幸子・伊原 恵子・大蔵 祥子・金井 照子 金子 裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる 木下 早苗・木下 玲子・梶原 勝子・小池千津子 小平不二子・小林 千枝・佐々木真奈美・田中 恵子 筒井千恵子・橋本 宣子・丹羽 由美・萩原 弘枝

林 勢紀子・原沢あゆみ・平栗 陽子・福沢 育子
福沢 幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内 八代
松本 恭子・三浦 厚子・南井 規子・宮内真理子
森 信子・森藤美知子・吉川紀美子・吉川 悦子
吉沢まつ美・若林志満子

事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課
竹村 隆彦（社会教育課長）
中井 洋一（社会教育課長文化係長）
小林 正春（社会教育課長文化係）
吉川 豊（社会教育課文化係）
馬場 保之（社会教育課文化係）
篠田 恵（社会教育課文化係）

II 遺跡の環境

1. 自然環境

鼎地区は、昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。合併前の下伊那郡鼎町は周囲を飯田市に囲まれた下伊那郡の飛地であった。鼎地区は、飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、東南側は松尾地区と下伊那郡上郷町に接する。地形を概観すると、標高500m前後に伊賀良地区を形成する、発達した扇状地形の末端部（扇端）があり、それより以東が鼎地区となる。鼎地区全体としては、微地形による変化はあるが、段丘の方向は、いずれも飯田松川に平行している。

田井座遺跡の立地する一色地区は、鼎地区の最上位段丘上にあり、飯田市伊賀良北方地区と接している。中央アルプスの笠山麓から発達した扇状地が終息し、段丘地形を示す付近で、天竜川の支流毛賀沢川による侵蝕谷が始まり、飯田松川に面した段丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地期部付近が一色地区で、その東方は名古屋地区となる。標高は500m前後で形成され始めた舌状台地の巾は約300mである。台地の中央部が縦方向（東西）にやや凹み湿地を成している。西側の段丘崖に近い部分約100mずつが乾燥した台地で、中央の約100mが湿地である。

台地上は、全面に強い粘質のローム層に覆われており、自然の風水害に対しては、安定した地形条件下にあるといえる。

田井座遺跡は、一色地区の西隅に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地の続きであり、伊賀良西の原地区に接する。南西側は毛賀沢川に面する台地の縁部が端で、東南側は鼎名古屋地区に接する。北東側は湿地を挟んで一色遺跡である。気賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間が、やや小高い台地で、中央から北東と南西に緩く傾斜している。

南西向の緩斜面は、水田の造形により削平埋立てがあり、ローム面まで削平か及んでいた。

北東側の緩斜面は、果樹園で深耕があったが削平はなく、地表から100～50cmでローム面であった。検出調査した遺構は、ローム面に掘り込まれている。

以上のように、田井座遺跡は台地端に位置し、乾燥した場所であるがすぐ近くに湿地があり、生活・生産に敵した場所と言える。

2. 歴史環境



1. 田井座遺跡
2. 一色遺跡
3. 下の原遺跡
4. 殿原遺跡
5. 八幡面遺跡
6. 小垣外遺跡
7. 立野遺跡
8. 山口遺跡
9. 上の金谷遺跡
10. 滝沢井尻遺跡
11. 酒屋前遺跡
12. 中島平遺跡
13. 日向田遺跡
14. 六反畑遺跡

挿図1 田井座遺跡及び周辺遺跡図

鼎地区における人間の足跡としては、先土器時代に始まる。断片的な資料ではあるが、天伯B遺跡・猿小場遺跡よりナイフ形石器の出土を見ている。

縄文時代に至ると、遺跡の分布状況はより濃密となる。しかし、現在までの調査例による早期・前期における資料は、切石地区の幾つかの遺跡にみられる程度である。

鼎地区において、本格的に人間の定着した姿がみられるのは、縄文時代中期以降といえる。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落址の展開した姿がある。縄文時代中期の代表的な遺跡としては、天伯A遺跡・柳添遺跡などがある。

縄文時代後期、晩期の遺跡での調査例は少なく、猿小場遺跡、山岸遺跡、日向田遺跡などが調査されている。

弥生時代後期になると、集落址の調査例が急増する。後期前半には、猿小場遺跡、山岸遺跡で住居址が調査されている。

後期後半の遺跡では、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるが、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という2つの傾向がみられる。

前者には低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は高位段丘面から扇状地上に多く、猿小場遺跡があげられる。

古墳時代後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸遺跡、天伯B遺跡、六反畑遺跡、黒河内遺跡で集落址が調査されている。古墳時代の遺跡としては、集落址の以外に特徴的なものとして古墳がある。

鼎地区には、現在消滅したものも含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は、後期古墳である天伯1号・2号古墳があり、最近調査した古墳に物見塚古墳がある。物見塚古墳については現在整理中である。

古墳時代後期を含め、奈良・平安時代以降は隣接する伊賀良地区に、東山道の経路と「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源などの問題を考える上で、注目すべき点があり、当鼎地区においてもそれらと関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は、地域内全域に分布し、猿小場遺跡では25軒と多くの住居址が検出されている。

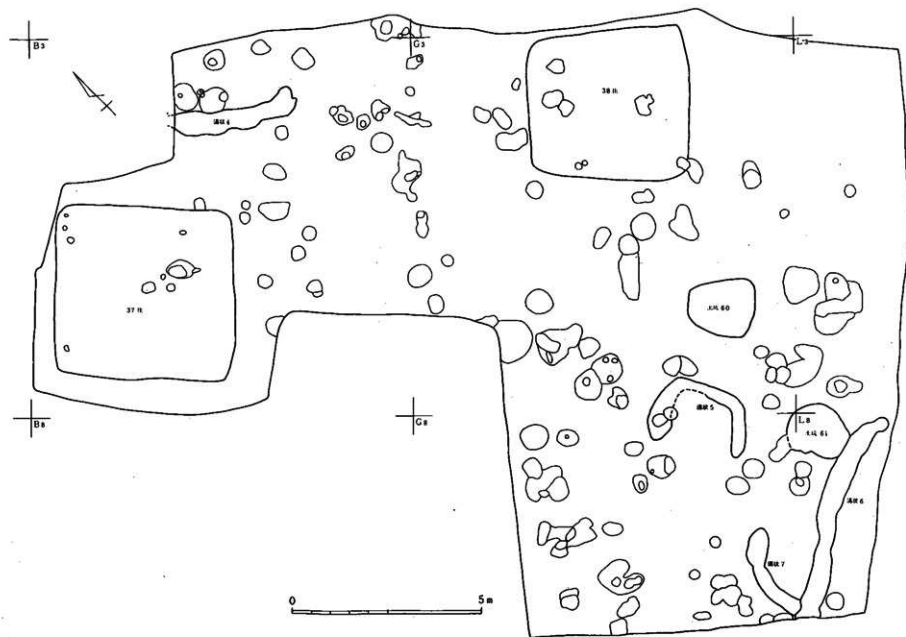
一般的には遺跡単位での住居址は少なく、散在する分布状態をみせている。

平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出されている。猿小場遺跡では、16軒の住居址が調査されている。

以上のような地区全体の歴史の流れの中に、今回調査結果がどのように位置付けられるのかは、本書の内容の中で、さらには今後の諸々の状況等を整理・検討する中で、より具体的にされるものといえる。



挿図2 田井座遺跡調査位置及び周辺図



挿図3 田井座遺跡跡構位置図

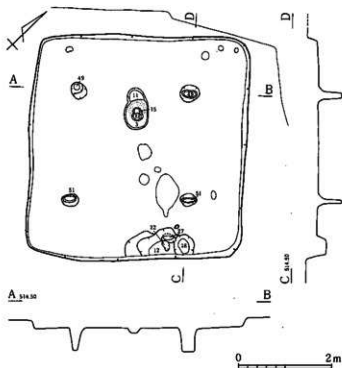
III 調査結果

1. 遺構と遺物

1) 竪穴住居址

① 37号住居址 (挿図4第1図)

調査範囲の西端に検出した。全体が調査できた、ほぼ正方形の竪穴住居址である。規模は4.7×4.6mを測る。主軸方向はN44°Wを示す。覆土は黒色土の一層である。確認できた壁高は9～24cmで、低い部分もあるが、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、壁ぎわのごく一部を除いて、叩き状のきわめて良好なものである。周溝は確認できなかった。主柱穴は4本で、どの穴も床面から10cm程の所で礎を持ち、これより下部はほぼ垂直な掘り込みとなる。垂直な掘り込みとなる部分は、西隅の一本を除いて北東、南西方向にやや長く掘られており、割り材を使用しているものと考えられる。穴の規模は30cm前後である。深さ49～52cmを測る。本址に伴う施設として、南東壁下、中央からやや北東に寄った位置の穴がある。床面から10cm程の凹みに、深さ12cmと5cmの穴が伴っている。凹み部の肩の部分には2～3cmの土手状の高まりが認められ、入り口施設と考えられる。炉址は、住居址中央から、やや北西に寄った位置にあ



り込みとなる部分は、西隅の一本を除いて北東、南西方向にやや長く掘られており、割り材を使用しているものと考えられる。穴の規模は30cm前後である。深さ49～52cmを測る。本址に伴う施設として、南東壁下、中央からやや北東に寄った位置の穴がある。床面から10cm程の凹みに、深さ12cmと5cmの穴が伴っている。凹み部の肩の部分には2～3cmの土手状の高まりが認められ、入り口施設と考えられる。炉址は、住居址中央から、やや北西に寄った位置にあ

挿図4 37号住居址

る。規模は60×50cm、深さ7cmを測る。中央には深さ9cmの穴状の凹みが二つ検出され、土器が埋められていた可能性もあるが、焼土の状態から地床炉と把握した。

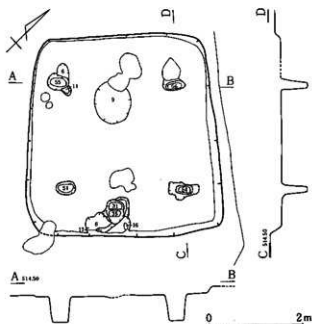
出土遺物は、少ない。土器に壺(第1図 1~3)と甕(4~6)のほか高杯細片がある。壺、甕、高杯とも焼成は良好なものである。壺頸部の胎土には石粒が混入し、ほかの壺、甕、高杯には小石粒、雲母が含まれ、赤粒も認められる。壺は明るい橙色、甕、高杯は茶色を呈している。石器には敲打器(8)と砥石(9)があるが、確実に本址のものであるかの判断はできない。

時代は、弥生時代後期後半に位置付けられる。

② 38号住居址(挿図5第1図)

調査範囲の北西側に検出した。方形竪穴住居址で、全体が調査できた。規模は4.2×4mを測るが、把握した北東側が3.4mと南東側に比べ短く、平面形は歪んだものとなった。主軸方向はN47°Wを示す。壁高は4~25cmを測る。壁面は良好残存部でも比較的緩く立ち上がる部分が認められた。周溝は確認できなかった。床面は全体に堅く良好なものであるが、壁直下と住居址中央部の一部に軟弱な所が認められた。主柱穴は4本である。すべて北東、南西方向に長く掘られており、割り材を使用しているものと考えられる。径は40×30cm前後を測る。深さは51~54cmである。本址に伴う施設として南東壁下のほぼ中央にある穴がある。数個の穴が切り合った状態で確認され、入り口施設の一部と考えられる。炉址は住居址中央部から、やや北西寄りに存在したのと考えられる。上部からの攪乱により壊されているが、わずかな焼土と凹みを把握した。炉址本来の規模は不明であるが、凹み部分の規模は90×80cm、深さは最深部で9cmを測る。

出土遺物は、きわめて少ない。土器には壺(第1図10・11)と甕(12・13)の破片がある。壺、とも焼成良好である。胎土中に



挿図5 38号住居址

は小石粒、雲母が含まれ、赤粒も認められる。壺は明るい橙色、甕は茶色を呈している。石器として敲打器(14・15)がある。うち一つ 15 は中央部に凹み部分が作られており、擦れも認められる。時期は、弥生時代後期後半に位置付けられ、住居址の形態等から37号住居址と同一時期に存在していた竪穴と考えられる。

2) 溝状址

① 溝状址4 (挿図6)

37号住居址の北東に検出した。北西側は未調査部分に延びており、確認できた長さは北西、南東方向に2.5mである。最大幅は65cmを測る。深さは15~26cmで、南東側へ低くなるが、南東端は途切れている。壁面は比較的緩く立ち上がり、底部との境が明瞭でない。また、壁面底部とも凹凸が激しい。

遺物は、何も出土しなかった。

時期を、把握できる材料は無く、性格も不明である。

② 溝状址5 (挿図6)

調査範囲の南東中央部に確認した。コの字形に検出され、それぞれ一片の長さは1.6cm程の長さを測る。立ち上がり一部確認できない部分もあるが、幅は35cmを測る。深さは4~10cmで、南隅が最深部となる。壁面は残存部が少ないためはっきりしないがほぼ垂直に立ち上がっていたものと考えられる。底部は平坦なものである。

遺物は、何も出土しなかった。

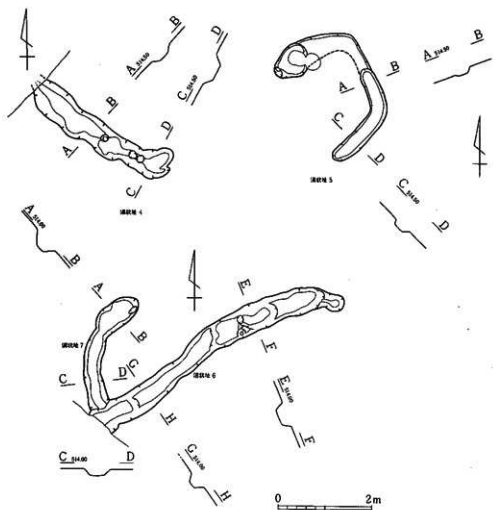
時期、性格は不明である。

③ 溝状址8 (挿図6)

調査範囲の南端に確認した。北東南西方向に5.8mを調査した。北東部は途切れているが、南西側は未調査部分に延びている。幅は55cm前後を測る。底部の凹凸が激しいため、深さは場所により差があり、検出前から8~32cmを測る。全体の比高差、北東から南西へ37cm低くなる。壁面は角度をもって立ち上がる部分と、緩く立ち上がる所があり、底部同様凹凸が認められる。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は不明である。



挿図6 溝状址4・5・6・7

④ 溝状址7 (挿図6)

調査範囲の南端に溝状址6と伴に検出された。南端は溝状址6と切り合っているが新旧関係は不明である。南北方向に弧を描いており、長さ2.4mを調査した。幅は40～50cmを測る。深さは15～19cmを測り、南へ4cm低くなる。底部は比較的平坦であるが、壁面には凹凸があり、緩く立ち上がっている。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格を判断できる材料はない。

3) 土坑

① 土坑60 (挿図7)

調査部分の南東側のほぼ中央部に検出した。平面形は歪んだ方形で、北西、南東方向に長い。規模は1.8×1.5mを測る。壁面は比較的緩やかに立ち上がっており、深さは15cmを測る。底部は平坦なもので、東端に深さ17cmの穴状の凹み部分があるが、本址に付属するものであるかの把握はできなかった。

遺物は、何も出土しなかった。

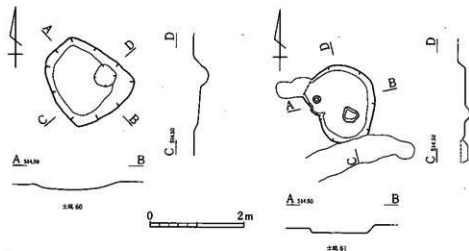
時期、性格は、不明である。

② 土坑61 (挿図7)

調査範囲の南に、溝状址6とわずかに接して確認された。西側がほかの穴と切り合うため歪んでいるが、平面形は楕円形を呈している。規模は1.6×1.2mを測り、南北に長い。壁高は16cmを測り、比較的緩やかに立ち上がっている。底部は平坦なもので、ほぼ中央部に穴が確認されたが、本址に付属するものかは不明である。穴の深さは11cmである。

遺物は、何も出土しなかった。

時期、性格は、不明である。



挿図7 土坑6・7

4) その他の遺構

① 時期不明の穴 (押図 8・9 第 1 図)

本調査区で確認した穴は100余りある。穴の規模は10cmから1mを測るものまでである。切り合いがあるものも有りはっきりしないが、歪む穴が多く50~80cmのものが大半を占めている。深さは検出面から5~75cmを測り、15cm前後の穴が多い。特に集中する場所、規則的な配列等は把握できなかった。覆土はほとんどのものが黒色土である。中に焼土を伴っているものも認められたが、最終的に細い溝状のものとなった。

遺物が出土した穴は2本あるが、時期のわかるものは縄文時代後期土器 (第 図16) のみである。しかし、穴に直接付属する可能性は少ない。

いずれの穴も、具体的な時期、性格は不明であるが、なんらかの柱を立てたものと考えられる。

5) 遺構外遺物 (第 1 図)

本調査地での遺構外遺物の出土量はきわめて少ない。縄文時代土器、弥生時代土器、灰釉陶器、中近世土器、陶器がある。

縄文土器数点のうち、時代のわかるものは第 1 図17のみで、晩期の条痕土器である。焼成は良好であるが、小石粒が混入して、器面は摩滅している。

弥生時代土器は、確認した住居址と同時期の弥生時代後期の土器である。18の壺のほか、図化できないが壺の口縁部片がある。両者とも焼成は良好、胎土中に小石粒と雲母を含んでいる。

灰釉陶器は一点のみで、細片のため器形は判断できない。胎土、焼成は良好である。

中近世遺物で、かろうじて器形の知れるものに、土鍋底部がある。小石粒を含み、焼成は良好である。

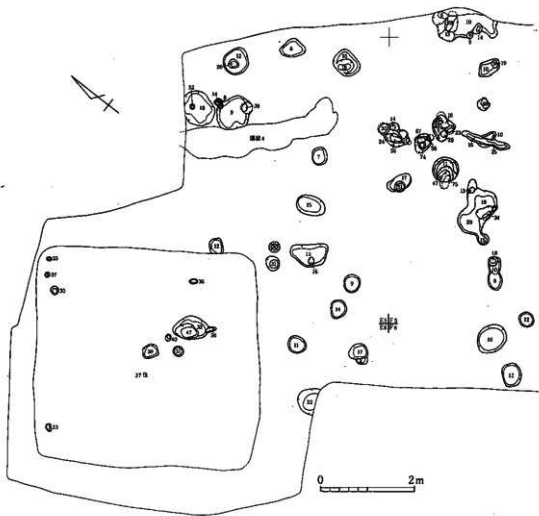


插图 8 时期不明穴址

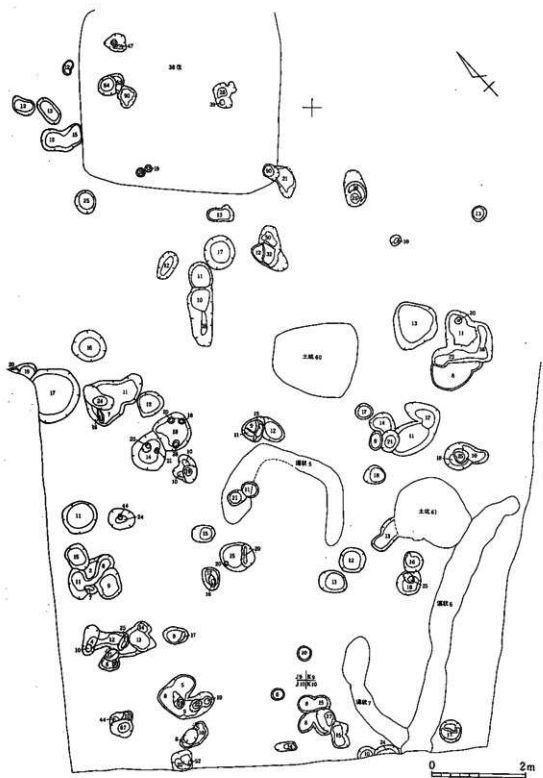


插图9 时期不明穴址（南东部）

IV ま と め

今回の調査により、弥生時代後期の住居址2軒のほか時代・性格等不明の溝址・穴等が発見されたことは本文中に記載したとおりである。限られた面積の調査であり、明かになった内容も多いとはいえず、今次調査地点のみで遺跡全体の性格等を言及することは困難であるが、周辺における既調査結果も合わせ、今次調査地点の一端推測し、本調査のまとめとしたい。

2軒の竪穴住居址はいずれも弥生時代後期のものであり、周辺一帯での調査結果により確認された25軒の住居址・10基の方形周溝墓などとともに該期集落の一面を成していたといえる。また地形的に遺跡の広がりを勘案すると、既調査面積は遺跡全体の1/5にも満たず、未調査部分により多くの遺構が存在すると推測される。

それらの遺構すべてが同時期に存在したのではないが、1時期における家の数は10～20軒で構成された可能性があり、それに伴って方形周溝墓なども構築されたといえる。

そうした仮定の中で、今次調査地点がどのように位置づけられるのかは、周辺における遺構分布の状況から、弥生時代後期後半のある時期において、集落の中心部分であったといえる。また2軒の住居址からの遺物出土量はきわめて少なく、特定の状況を判断する材料も無く、ごく一般的な住居といえる。さらに、中心部分に所在すると判断される本2軒の住居址の希薄な出土遺物の内容は、本集落そのものの性格も規定し、限定された生産活動の中で存続し得たあまり規模の大きくない、該期における周辺部の集落である可能性も導かれる。

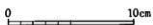
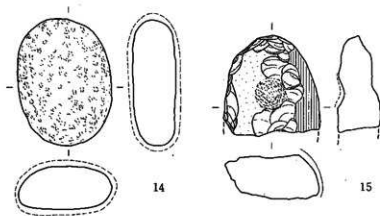
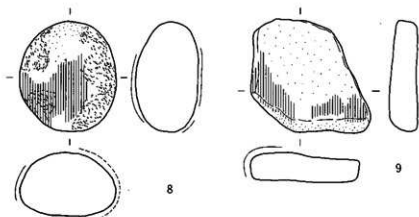
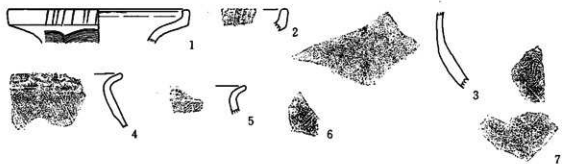
次に、弥生時代以外の位置づけであるが、具体的な事実の確認はできなかったが、周辺部の調査結果によれば、縄文時代前期初頭及び中世の集落址を成していた事実が判明しており、何らかの形で関与していた地点といえる。しかし、具体的に各時代の内容を補足する資料は得られておらず、その姿を判断するのは困難ではあるが、時期不明の諸遺構が各時期に属する可能性も否定できない。

いづれにしても、限定された調査範囲であり、本報告では確認された事実の記載を本旨としたもので、遺跡全体についての考証等は総合的に行つてのみ得られることはいうまでもなく、別の機会により具体的な判断をゆだね、本書のまとめとしたい。

参考文献

- 市村威人 1955「下伊那史」第2巻 下伊那史編纂会
市村威人 1955「下伊那史」第3巻 下伊那史編纂会
松島信幸 1966「下伊那の段丘」 下伊那地質調査資料No.2
中央道遺跡調査会 1970「中央道調査報告-飯伊だ地区」長野県教育委員会
中央道遺跡調査会 1972「中央道調査報告-飯田市内その2-」長野県教育委員会
中央道遺跡調査会 1975「中央道調査報告-下伊那郡鼎町その2-」長野県教育委員会
飯田市教育委員会 1980「猿小場遺跡」
鼎町教育委員会 1984「鼎町黒河内遺跡」
飯田市教育委員会 1985「町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」
飯田市教育委員会 1989「六反畑遺跡」

圖 版



第1圖

写真図版

図版 1



調査地 調査前（北から）



調査区全景（北西から）



37号住居址
(北東から)



同上入口部施設



同炉址

図版 3



38号住居址
(南東から)



同上入口部施設



同炉址



溝状址 5



溝状址 6・7
(奥 6・手前 7)



土坑60

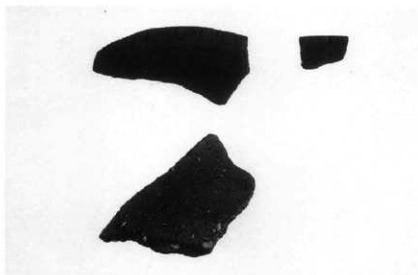
図版 5



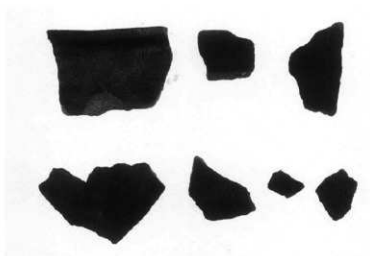
北西部時期不明穴址及び溝状址 4



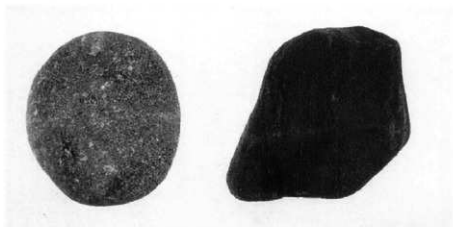
南東部時期不明穴址



37号住居址
出土異物
(壺)

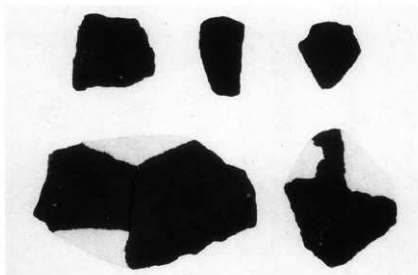


同上
(甕)

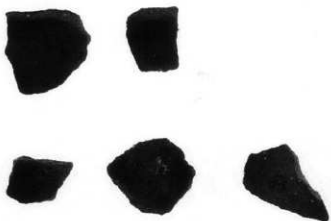


同
(石器)

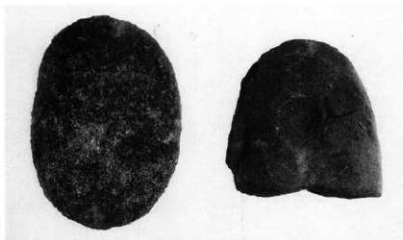
图版 7



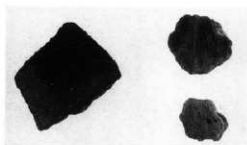
38号住居址
出土遺物
(壺)



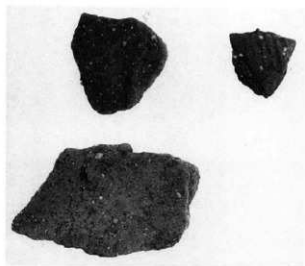
同上(壺)



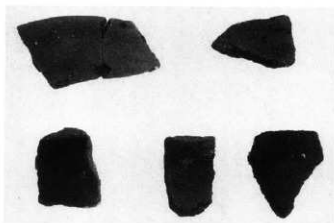
同(石器)



時期不明穴址出土土器



遺構外出土土器



同上



同上

図版 9



トレンチによる試掘調査



試掘トレンチの精査



試掘トレンチ
掘上げ状態



重機による
表土剥ぎ作業



住居址掘下げ作業



住居地掘下げ作業



遺構掘下げ
及び測量作業



同上

田井座遺跡

店舗建設に先立つ埋蔵文化財
包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市教育委員会
印刷 龍共印刷株式会社

